

令和6年度「いじめ実態調査」の調査結果について

(1) 調査目的

本調査は、いじめ防止のための教育に生かすことを目的に、平成18年から毎年行っている。学校生活への満足度、いじめの態様、いじめ被害者の対応、継続の状況、いじめへの意識等を各校が把握するとともに、尾張旭市内の小中学生全体の傾向を捉える資料としている。

(2) 調査実施期間

令和6年7月（市内小学校9校、中学校3校の計12校で、学校単位で実施）

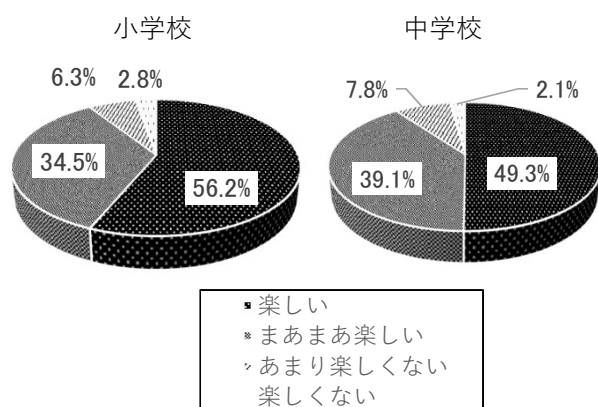
(3) 調査対象数

小学校児童調査総数 4623人 （回答率 97%）

中学校生徒調査総数 2090人 （回答率 91%）

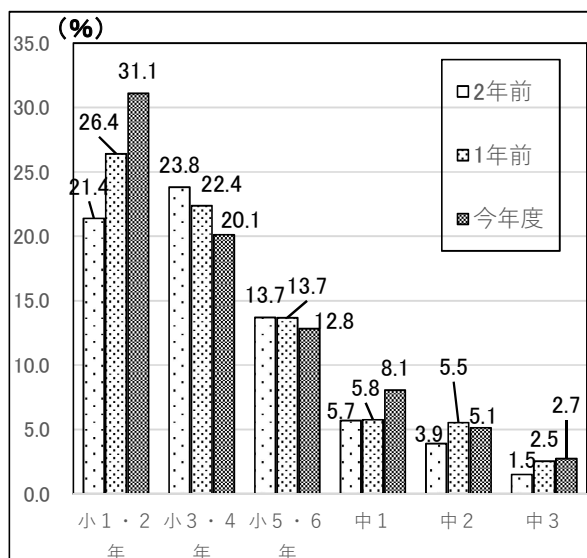
(4) 調査結果概要

Q：学校は楽しいですか？



昨年度とほぼ同様の結果である。小・中学校ともに、90%程度が、学校生活は「楽しい」「まあまあ楽しい」と回答しており、多くの児童・生徒は楽しく学校生活を送っていると言える。昨年と比べ、「あまり楽しくない」「楽しくない」と回答している児童・生徒が減少傾向にある。しかし、依然として、学校に対して楽しくないという気持ちを抱く児童・生徒が10%近くいるので、学校生活が楽しくないと思う原因を探り（学校のことか、それ以外か）、解決や改善のための支援を具体的にできるようにする必要がある。

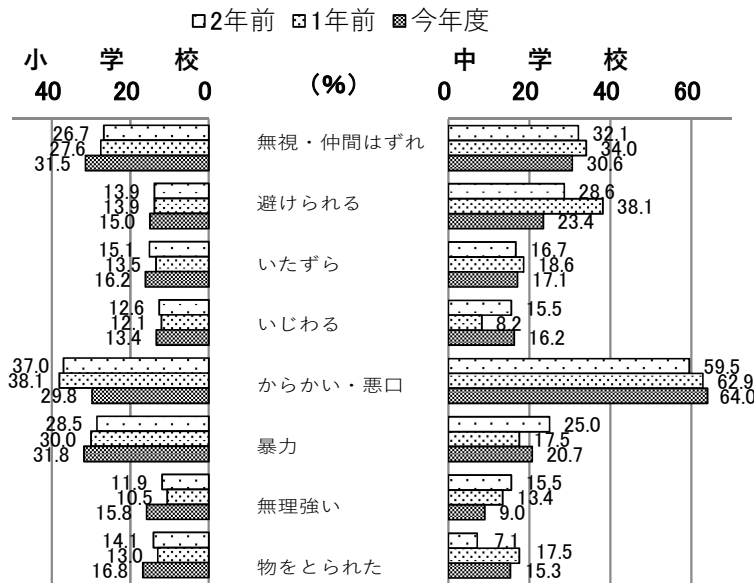
Q：今の学年でいじめられたことはありますか



例年と同様、「いじめられた」という回答は、年齢が低いほど多く、年齢が高くなるにつれて少なくなる。これは、低学年のうちは、日常の単発的な「トラブル」も含めて「いじめ」と捉えているからだと考えられる。しかし、どの学年でも「いじめられた」という認識をもつ児童・生徒がいることは間違いない。嫌な思いをしたり、苦しんでいたりする児童・生徒がいることを念頭に置き、対応・対策していく必要がある。また、小学校低学年と中1の割合が昨年度より高くなっているので、注意深く観察し、組織的な対応・対策を行い、確実にいじめを減らしていくことが大切である。

また、今後の課題としては、児童・生徒及び保護者、教職員が抵抗なくいじめに関して相談できる体制を整備するとともに、児童・生徒や保護者の悩みを積極的に受け止められているか、適切に機能しているかなど、定期的に点検することが必要である。

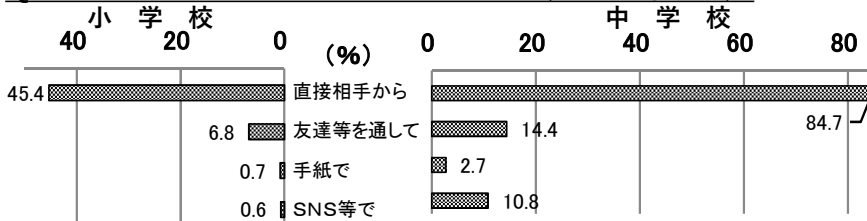
Q：どんないじめをされましたか



被害側が認識しているいじめの態様としては、小・中学校ともに「からかい・悪口」「無視・仲間外れ」が多い。「からかい・悪口」には、いわゆる「いじり」も含まれているとみられる。悪意がなくても、相手が嫌がっていれば「いじめ」になりうることを指導していかなければならない。また、「無視・仲間外れ」については、加害側と被害側が入れ替わりながら繰り返されるケースが多い。小学校では「暴力」が多くなっている傾向にあるので、トラブルに発展する前に日頃から児童が教員に相談する体制づくりをしていくことが重要である。

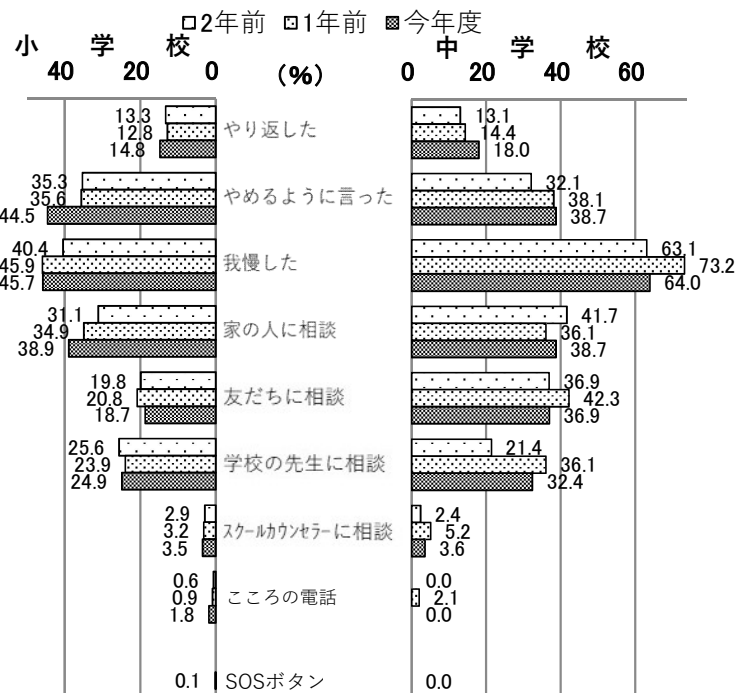
いじめは相手の心を傷つける卑劣な行為であることを学級活動などの時間に実際のいじめの事例や動画教材などを活用して児童・生徒同士で検討したり、いじめ場面のロールプレイを行ったりするなど、体験的な学びの機会を用意して、児童・生徒一人一人に考えさせる必要がある。

Q：どんなふうにいじめをされましたか（小学3年以上）



この設問は今年度からだが、やはり直接的に受けるいじめが多かった。反対にネット・SNS関係の項目は少ないが、小学校高学年や中学校では、実際に生徒指導上の問題も起きており、今後は対応が必要になると考える。授業等でネット・SNSのリスク回避能力を身につけさせるとともに、ルールを守ろうとする心を育てることが重要である。

Q：いじめられてどうしましたか

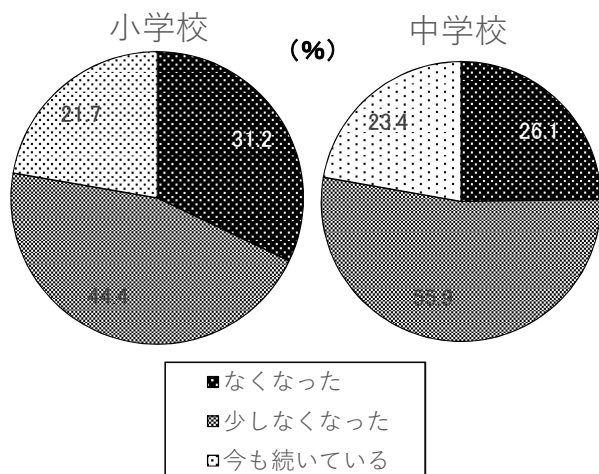


小・中学校ともに「がまんした」の割合が高い数値である。直接やめるように言えない児童・生徒が、がまんをして、ストレスを溜め込み、どうすればよいかわかってしまっていることも考えられる。児童・生徒が、がまんすることなく、解決に向けての相談や取り組みができるようにしていかなければならない。

家の人や学校の先生、友達に相談する項目も高く、小・中学校ともに何かあったら相談する傾向にある。そういった点をさらに伸ばすためにも、児童・生徒と向き合う時間を充分確保し、何でも相談できる関係性をつくるのが大切である。また、困ったときに隠して耐えるのではなく、弱音を吐いたり、人に頼ったりすることができる雰囲気づくりが重要で、「困った、助けて」と言える雰囲気と「困った」をしっかり受け止めることができる体制を学校の中に築くことが必要である。

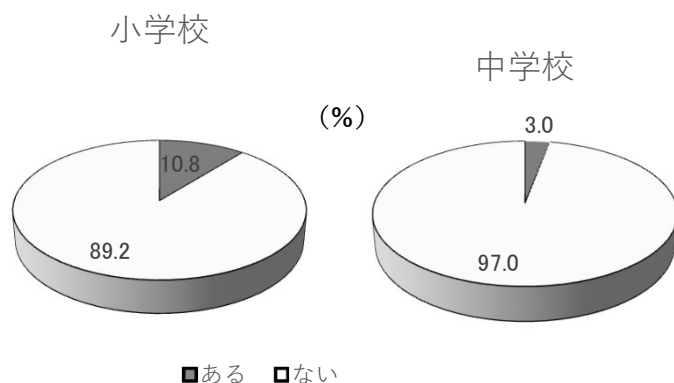
そして、担任だけでなく、養護教諭、授業や部活に関わりのある教員が、子どもたちの変化に敏感にならなければならない。また、SCや心の教室相談員などの紹介や周知を積極的に進めていく必要がある。

Q：いじめはどうなりましたか



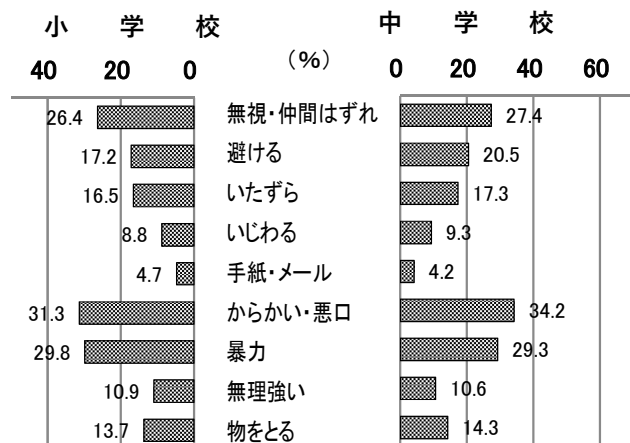
いじめられたと答えた児童生徒数（小学校：941人、中学校：111人）のうち、「いじめがなくなった」と回答したのは、小学校で約31.2%、中学校で約26.1%であった。逆に、小学校で約66.1%、中学校で約79.3%（一部未回答のため）もの児童・生徒が、何らかの形で「いじめが続いている」と回答している。現在進行形で、多くの児童・生徒がいじめによる苦痛を感じているという現状を重く受け止め、対応に努めなければならない。いじめを早期に気付くために、表面的な言動だけを見るのではなく、児童・生徒の背後にどのような感情があるのかに思いを馳せ、児童・生徒の表情や学級の雰囲気から違和感に気付き、いじめの兆候を察知する必要がある。また、家庭や地域、関係機関と連携し、いじめに気付くネットワークを拡げることが必要で、学校の「気付き」と家庭・地域の「気付き」を重ね合わせることで、いじめの早期発見が可能になると考える。

Q：今の学年でいじめをしてしまったことはありますか



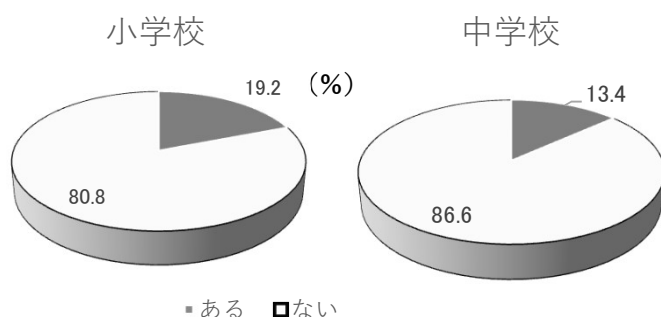
「いじめをしてしまった」と回答した児童・生徒は、小学校で約10%、中学校で約3%であった。「いじめられた」という回答と比較すると半数程度であり、加害側の自覚・認識が低いことがわかる。しかし、前向きな捉え方をすれば、加害側にも「いじめをしてしまった」ことを自覚・認識できている児童・生徒が半数程度はいると考えられる。いじめの行為は絶対に許せないという毅然とした態度をとりながらも、「いじめをしてしまった」という児童・生徒の成長支援の視点に立って、内面に抱える不安やストレスなどを受け止めるように心がけることが必要である。

Q：どんないじめをしてしまいましたか



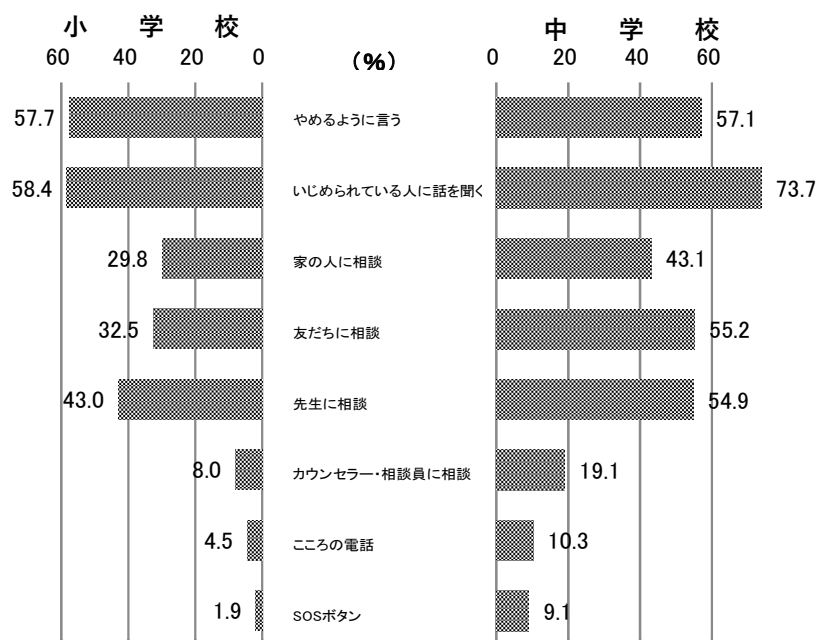
「いじめをしてしまった」児童・生徒の具体的な内容として、小・中学校ともに「からかい・悪口」、「暴力」、「無視・仲間外れ」が多い。いじめは良くないと頭でわかっているにもかかわらず、いじめをしてしまう児童・生徒の心理や感情の背景に注目する必要がある。その心の深層には不安や葛藤、劣等感、欲求不満などが潜んでいることが多い。また、いじめに無自覚である場合も多い。そこで、児童・生徒に内面理解に基づく丁寧な働きかけが必要になると考える。したがって、頭で理解しているだけでなく、行動レベルで「いじめはしない」という感覚を、学校や家庭での日常生活の中で身に付けられるように働きかけることが重要である。

Q：今の学級でいじめを見たり聞いたりしたことはありますか



昨年度はいじめを見たり聞いたりしたことがあると答えた割合が、小学校で18.8%、中学校では10%だったのに対し、今年度は増加傾向にある。いじめの多くが同じ学級の児童・生徒間で発生することを考えると、学級担任が、いじめられる側を「絶対に守る」という意思を示し、根気強く日常の安全確保に努める取り組みを行うなどして、担任への信頼感と学級への安心感を育み、いじめを許容しない雰囲気を浸透させることが重要である。

Q：いじめを見たらどうしますか



小・中学校ともに、「やめるように相手に言う」「いじめられている人に話を聞く」と回答している児童・生徒の割合が多く、被害者に寄り添おうとする気持ちが育っていると考えられる。また、「先生に相談」や「友達に相談」する児童・生徒の割合が多く、いじめを見たら相談しようとする体制ができています。一方、「家の人に相談する」割合が先生や友達に相談する割合に比べて少なく、いじめの内容を家の人に相談しにくいことが予想される。

しかし、相談関係の項目は、どれも数値として十分という訳ではない。被害者が一人で抱え込んでしまわないために、誰か（どこか）に「相談できる」状況をつくるのが大切である。教員が「相談」の重要性を発信するとともに、より良い相談相手となれるよう、普段の声かけなどを通して、一人一人の心と向き合い、信頼関係をつくっていく必要がある。

(5) 全体として

いじめは、子ども成長過程の人間形成に大きな影響を与える問題である。早期に発見し、解決することが何よりも重要である。各学校においては、今後もいじめの認知率を高め、「いじめを見逃さない」という姿勢を教職員間で共有するとともに、次の段階の取り組みとして、いじめを生まない環境づくりを進めることが必要である。そして、児童・生徒一人一人がいじめをしない態度・能力を身に付けられるよう、各教科での学習、道徳や特別活動、体験学習などを通して、継続的にいじめ未然防止教育を行うことが重要である。また、家庭や地域、関係機関と連携し、いじめに気付くネットワークを拡げることも重要で、学校の「気付き」と家庭や地域、関係機関の「気付き」を重ね合わせることで、学校だけでは見逃されがちないじめの早期発見が可能になると考える。

今後は、いじめを早期発見できるネットワークを拡げるとともに、児童・生徒自身がお互いを多様な存在として認め合い、「自己指導能力」を身に付けることが必要である。児童・生徒が、何が正しく何が間違っているかを自分の頭で考えることができるようになり、理不尽なことがまかり通らない世の中を担う大人へと育ていくことが私達、教員の責務であると考えている。